

平成 19 年 4 月 10 日

松江高専・米子高専 研修報告

物理化学系班 増田 博代

1. はじめに

技術室運営に係る高専間交流による情報収集ならびに技術室報告集編集等の研修のため、松江高専および米子高専を訪問したので報告する。

2. 日程

2007 年 3 月 21 日～3 月 23 日

3. 用務先

松江高専	島根県松江市西生馬町 14-4	技術長	小松原祐二
米子高専	鳥取県米子市彦名町 4448	技術長	六宮光郎

4. 研修内容

両高専ともに技術長ほか班長クラスの方々に面接し、調査項目について質問し次ページ表に示す回答を得た。その後構内を案内され各所で技術職員の業務内容等説明を受けた。

5. 調査内容

次ページ参照

6. 所感

技術職員の組織化は宇部高専が平成 11 年で、全国で一番早かったそうである。そのせいか西日本は比較的早く組織化が進み、今回訪問した 2 校も組織化後 4～5 年目を迎えるところで組織内も安定して軌道に乗っている印象を受けた。松江高専では正技術職員は 13 名と少なく当分定員削減の対象になっていない。再雇用も今年定年を迎える技術長が学校側から要請されてフルタイムで残り、他 1 名はパートだが同じ職種で残ることが決定している。松江では年齢層が若く人数も少ないためか大変和気藹々として仕事を楽しんでいる様子が伺えた。先代の校長が技術職員に対して手厚い待遇をしてくれたおかげで各自がのびのびと自己の技量を発揮している様子である。また支援業務に対して、終了時に担当教員へアンケートを取り、結果を公表する制度はかなりシビアと感じたが、5 段階評価でこれまで殆どが 5 点であるという。結果を評価すると教員、技術職員双方が切磋琢磨することになるのであろう。

米子高専ではおそらく全国でも類を見ないと思うが、専門員が 3 名配置されている。技術長の言によれば技術室からの推薦を学校側がそのまま受理し機構本部へ申請してくれるからだそうである。松江高専の 1 年後に組織化され近隣である点もあって情報交換をよくし、松江の委員会制度を取り入れて、業務上の班とは別に役割担当を決めたという。責任体系を明確にしている点は参考にすべきではないだろうか。

実際に他校を訪問し聴取することにより、多くの参考となる事例を得ることができた。風土による地域性、学科の種類、人員構成など差異はあっても、技術室の在り方、業務内容、教員との関係性、自己研鑽、定員削減、再雇用の問題など全国の高専技術職員は同じ立場にいることを痛感した。

両校ともに面接された方々が、沼津高専の学生の質の高さを挙げ、それは教員ともども技術職員の大きな貢献があるから、という見解を示して頂き、今後の励みとなった。

7. 参考資料

松江・技術室入口



松江・技術室内



米子・ものづくりセンター入口



米子・ものづくりセンター内部



松江高専では実践教育技術センターという名称だが、技術室の表札があった。これは技術職員への大きな理解を持って発足を推進させた先代校長の揮毫による。

米子ものづくりセンターはごく最近の建設で（2006年11月リニューアルオープンとのこと）大変整然として、機器や装置も新しい印象。看板がわかりやすい。所々に学生の作った安全標語（コンテストによる入賞作品）が吊るされており面白い。

松江・
たたら製鉄炉



出雲・石見のたたら製鉄は、まさ土（砂鉄を多く含む）の分布により近世多くの生産を誇ったが、現代の高炉に変わってからは企業でも年2-3回の操業という。松江高専実習工場内に、このたたら製鉄炉が作られており、公開講座等でこの炉を使って実際に鋼をつくり、作った鉄を加工して鍛造や研ぎの体験学習を行っている。河原から運んできた砂（砂鉄）の入った袋がセンター内に無造作に置かれていた。

写真のたたらは高さ170cm位、幅1m未満ほど。ここに砂を入れ、火を入れるが、その温度はうまく砂の中の不純物を溶かし鉄だけを取り出せるそうである。

米子・技術教育セ
ンター入口



米子・技術教育セ
ンター内部



米子高専は3年前に耐震改修を行い、それにあわせて技術教育センターが一部屋設けられている。室内は広く16名が一堂に会してもなお余裕がある。この部屋に六宮技術長が一人で常駐していた。